

平成 29 年度学校保健統計調査結果

全体的に全国値より高身長・低体重

—裸眼視力 1.0 未満の者は前年度より増加—

府企画統計課生活統計担当

はじめに

この度、平成 29 年度の学校保健統計調査結果がまとまりましたので、その概要をお知らせします。

学校保健統計調査（統計法に基づく基幹統計調査）は、学校保健安全法により各学校が毎年 4 月から 6 月の間に実施している健康診断の結果に基づき、幼児、児童及び生徒の発育及び健康状態を明らかにし、学校保健行政のための基礎資料を得ることを目的として、文部科学省が都道府県を通じて調査を実施しています。

調査対象として抽出された府内の国・公・私立の学校 164 校の幼児、児童及び生徒についての発育状態調査（身長・体重）及び健康状態調査（各種の疾病・異常）の結果を掲載します。

調査対象幼児・児童・生徒数は表 1 のとおりです。

表 1 調査対象幼児・児童・生徒数

（単位：校、人）

区分	調査実施 学校数 (校)	調査対象者数(人)					
		発育状態調査			健康状態調査		
		合計	男子	女子	合計	男子	女子
幼稚園	34	1,247	620	627	1,810	888	922
小学校	60	5,688	2,845	2,843	29,780	15,261	14,519
中学校	40	4,610	2,279	2,331	19,848	9,967	9,881
高等学校	30	2,565	1,260	1,305	26,128	13,250	12,878
合計	164	14,110	7,004	7,106	77,566	39,366	38,200

注 幼稚園には幼保連携型認定こども園を含む。

発育状態

1 身長・体重の京都府平均値及び全国との比較

平成 29 年度の幼稚園、小学校、中学校及び高等学校の幼児、児童及び生徒の身長及び体重の京都府平均値を年齢別にみると第 1 表及び第 2 表のとおりです。（第 1 表、第 2 表）

【身長】

男子は前年度と比較すると、全年齢を通して前年度並みです。各年齢間の身長差は 12 歳と 13 歳の間（7.9cm）が最も大きく、次いで 11 歳と 12 歳の間（7.2cm）が大きくなっています。全国平均値と比較すると、幼稚園・小学校及び高等学校では全国平均を上回る傾向がありますが、中学校では全国平均を下回る傾向があります。

女子は前年度と比較すると、小学校までは上回る年齢が多いですが、中学校からは下回る年齢が増加します。各年齢間の身長差は 9 歳と 10 歳の間（7.2cm）が最も大きく、次いで 7 歳と 8 歳の間（6.4cm）が大きくなっています。全国平均値と比較すると、11 歳及び 13 歳を除いて上回っています。

10 歳及び 11 歳では女子の身長が男子の身長を上回っています。

【体 重】

男子は前年度と比較すると、上回る年齢が多いですが、動きは小幅なものとなります。各年齢間の体重差は、12歳と13歳の間（5.9kg）が最も大きく、次いで13歳と14歳の間（5.6kg）が大きくなっています。全国平均値と比較すると、15歳までの全年齢で全国平均を下回っていますが、16歳以降では上回っています。

女子は前年度と比較すると、上回る年齢が多いですが、動きは小幅なものとなっています。各年齢間の体重差は、11歳と12歳の間（5.0kg）が最も大きく、次いで9歳と10歳の間（4.7kg）が大きくなっています。全国平均値と比較すると、下回る年齢が多くなっています。

11歳及び12歳では女子の体重が男子の体重を上回っており、10歳では同値となっています。

2 肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

肥満（痩身）傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から求めた肥満度が20%以上（-20%以下）の者のことで、 $\langle (実測体重 - 身長別標準体重) \div 身長別標準体重 \times 100 \rangle$ により計算します。（第3表）

【肥満傾向児】

肥満傾向児の出現率は、男子では17歳（13.0%）が最も高くなっています。女子でも17歳（8.8%）が最も高くなっています。

全国の出現率と比較すると、男子10歳、16歳及び17歳、女子の5歳、15歳及び17歳を除くすべての年齢で下回っています。また、男女計では、10歳、16歳及び17歳を除く年齢で全国値を下回っています。

なお、男子の12歳、女子の9歳及び13歳は全国で最も低い数値です。

【痩身傾向児】

痩身傾向児の出現率は、男子では10歳（4.7%）が最も高くなっています。女子では12歳（5.4%）が最も高くなっています。

全国の出現率と比較すると、男子では9歳から12歳で全国平均値より1%以上上回っています。女子では11歳から13歳及び15歳で全国平均値より1%以上上回っています。また、男女計では、5歳、6歳及び17歳を除く年齢で全国値を上回っています。

なお、男子の14歳及び女子の13歳は、全国で最も高い数値です。

図1 肥満傾向児の全国比

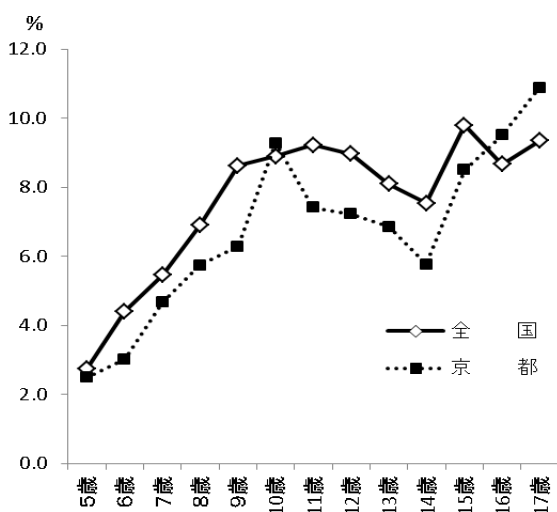


図2 痩身傾向児の全国比

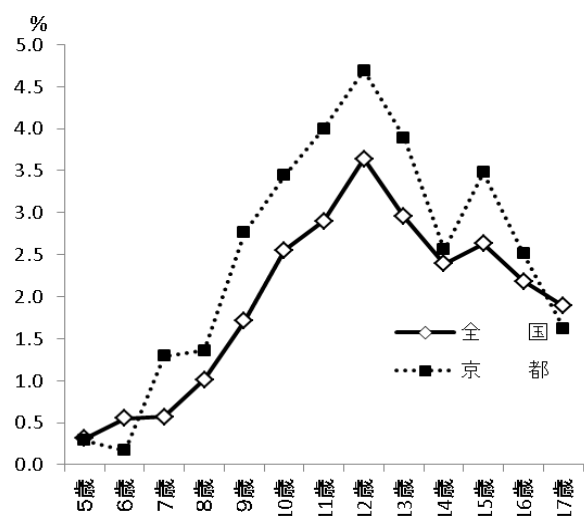


表2 年齢別肥満傾向児及び痩身傾向児の出現率

(単位：%)

	男子				女子			
	肥満傾向児		痩身傾向児		肥満傾向児		痩身傾向児	
	京都府	全国	京都府	全国	京都府	全国	京都府	全国
5歳	1.54	2.78	0.15	0.33	3.45	2.67	0.44	0.29
6歳	3.18	4.39	0.20	0.47	2.85	4.42	0.14	0.64
7歳	4.46	5.65	1.35	0.53	4.89	5.24	1.22	0.61
8歳	5.60	7.24	1.32	0.95	5.88	6.55	1.39	1.07
9歳	7.80	9.52	3.51	1.57	4.67	7.70	1.97	1.86
10歳	11.26	9.99	4.70	2.66	7.22	7.74	2.14	2.43
11歳	8.51	9.69	4.36	3.27	6.25	8.72	3.62	2.52
12歳	6.77	9.89	4.03	2.96	7.67	8.01	5.36	4.36
13歳	7.96	8.69	2.61	2.26	5.74	7.45	5.20	3.69
14歳	7.07	8.03	2.98	2.05	4.40	7.01	2.12	2.74
15歳	8.96	11.57	3.50	3.01	8.04	7.96	3.45	2.24
16歳	12.75	9.93	3.11	2.50	6.37	7.38	1.92	1.87
17歳	13.04	10.71	1.55	2.09	8.78	7.95	1.68	1.69

注：肥満(痩身)傾向児とは、性別・年齢別・身長別標準体重から肥満度を求め、肥満度が20%以上(-20%以下)の者である。
 肥満度=(実測体重-身長別標準体重)÷身長別標準体重×100(%) 京都の太字は全国最小値又は最大値

【参考】10年前の体重との比較

今回の調査結果を、10年前の平成19年度の結果と比較すると、男子では6歳から10歳、女子は6歳から8歳、10歳、15歳、17歳を除く年齢で体重が減少しています(男子の6歳及び7歳、女子の17歳は同値)。

【参考表】年齢別体重の10年前との比較(京都府)

(単位：kg)

	平成29年度		平成19年度		増減	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
5歳	18.7	18.3	18.9	18.4	△0.2	△0.1
6歳	21.2	20.8	21.2	20.6	0.0	0.2
7歳	23.9	23.2	23.9	22.9	0.0	0.3
8歳	27.0	26.5	26.8	26.3	0.2	0.2
9歳	30.3	29.4	30.0	29.6	0.3	△0.2
10歳	34.1	34.1	33.5	34.0	0.6	0.1
11歳	37.5	38.1	38.0	38.6	△0.5	△0.5
12歳	42.3	43.1	43.3	43.5	△1.0	△0.4
13歳	48.2	46.2	48.9	47.0	△0.7	△0.8
14歳	53.8	49.4	54.1	49.7	△0.3	△0.3
15歳	58.5	51.6	59.0	50.9	△0.5	0.7
16歳	61.1	52.0	61.3	52.9	△0.2	△0.9
17歳	63.4	53.3	63.8	53.3	△0.4	0.0

3 親の世代(30年前の昭和62年度の数值)との比較

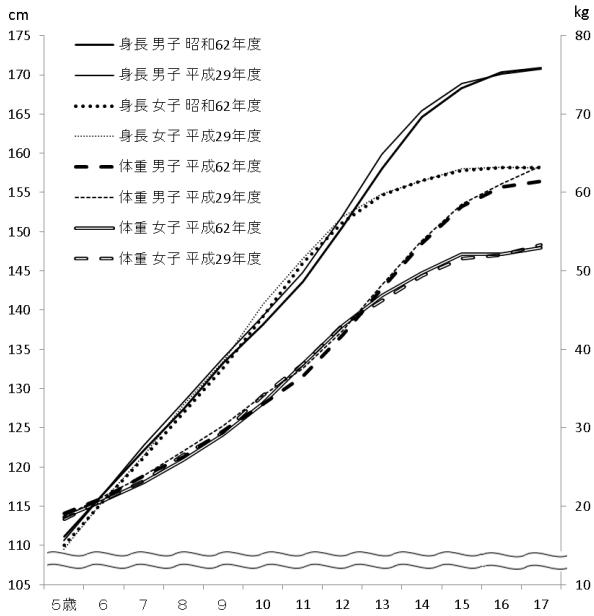
【身長】

平成29年度の身長を親の世代(30年前の昭和62年度の数值)と比較すると、最も差がある年齢は、男子では13歳で親の世代より1.8cm高く、次いで12歳で1.4cm高くなっています。女子では10歳で親の世代より1.6cmと最も高く、次いで8歳で1.0cm高くなっています。

【体重】

平成29年度の体重を親の世代と比較すると、最も差がある年齢は、男子では17歳で親の世代より2.0kg重く、次いで10歳で1.1kg重くなっています。女子では10歳で親の世代より1.0kg重く、次いで13歳で0.7kg軽くなっています。(第4表)

図3 年齢別体格の状況



4 発育量の累計、親の世代との比較

平成 11 年度生まれの者（平成 29 年度 17 歳、以下「子の世代」という。）と昭和 44 年度生まれの者（昭和 62 年度 17 歳、以下「親の世代」という。）の 5 歳から 17 歳までの発育量の累計を比較すると、男子は親の世代が身長で 0.8cm 上回っていますが、体重では子の世代が 1.6kg 上回っています。女子は親の世代が身長で 0.8cm、体重で 0.2kg 上回っています。（第 5 表、第 6 表）

図4 発育量の累計、親の世代との比較（身長）

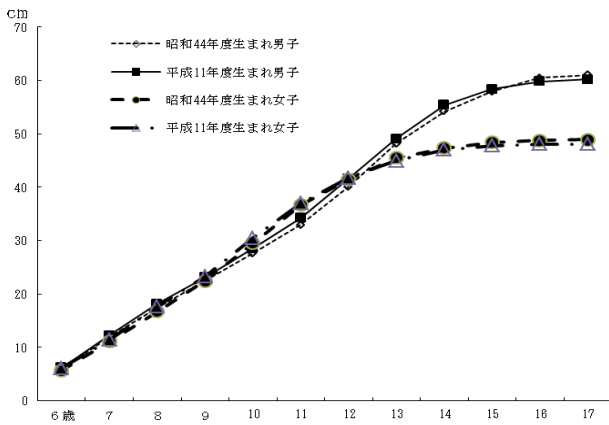
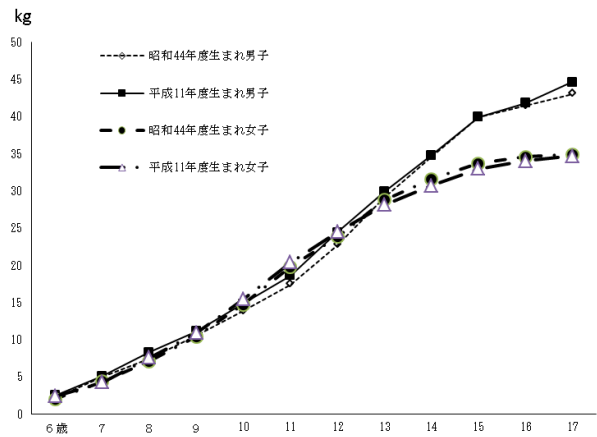


図5 発育量の累計、親の世代との比較（体重）



注：「6歳」は5歳から6歳の発育量、「7」は5歳から7歳の発育量の累計、以下同様。

健康状態

1 疾病・異常の被患率等別の状況

疾病・異常を被患率等別にみると、「むし歯（う歯）」と「裸眼視力 1.0 未満の者」が他の疾病・異常に比べて高く、各学校段階で最高か、それに次ぐ高さとなっています。（第 7 表、第 8 表）

2 主な疾病・異常等

【裸眼視力 1.0 未満】

平成 29 年度の「裸眼視力 1.0 未満の者」の割合は、小学校 32.9%、中学校 53.3%、高等学校 69.6% となっています。また、幼稚園は疾病・異常被患率の標準誤差が今年度 5% 以上のため非公表となります。前年度と比べると、全ての学校段階で上回っています。5 年ごとの推移をみると、中学校女子以外で増加傾向がみられます。

全国平均値との比較では、京都府は小学校段階、高等学校段階で上回っており、中学校段階で下回っています。また、男子より女子の被患率が上回る傾向があります（5 歳、13 歳及び 14 歳は非公表）。

図 6 裸眼視力 1.0 未満の者の推移

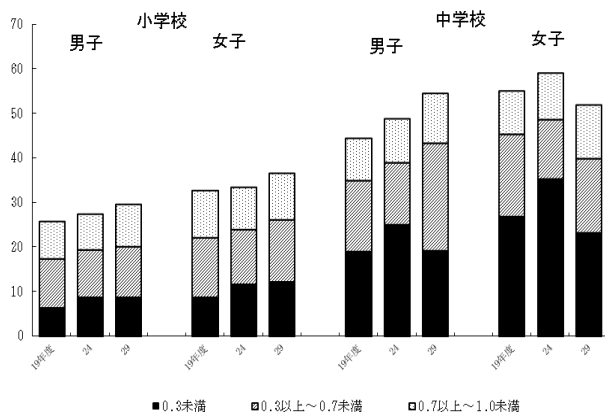
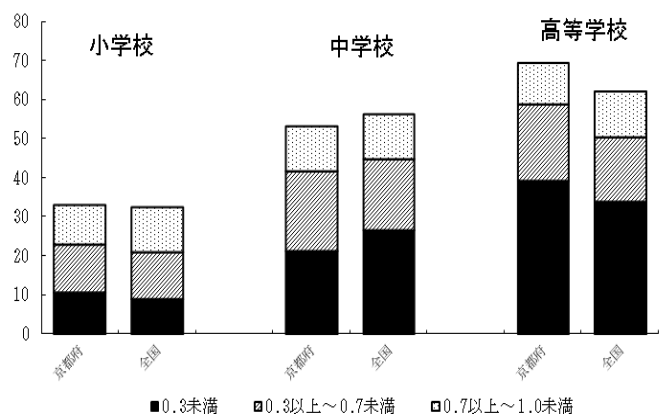


図 7 裸眼視力 1.0 未満の者全国比



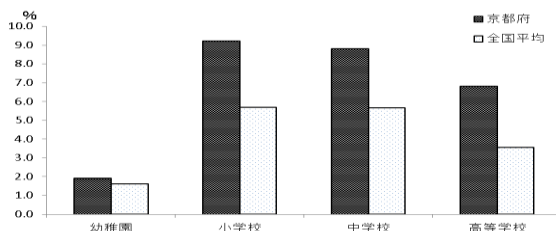
※非公表の裸眼視力 1.0 未満の者の割合については、疾病・異常被患率等の標準誤差が 5% 以上、受検者数が 100 人（5 歳は 50 人）未満または回答校が 1 校以下のため統計数値を公表していません。

【眼の疾病・異常】

平成 29 年度の「眼の疾病・異常」の者の割合は、幼稚園 1.9%、小学校 9.2%、中学校 8.8%、高等学校 6.8% となっており、前年度と比べると幼稚園を除く学校段階で減少しています。

全国平均値と比較すると、京都府は全ての学校段階で上回っています。

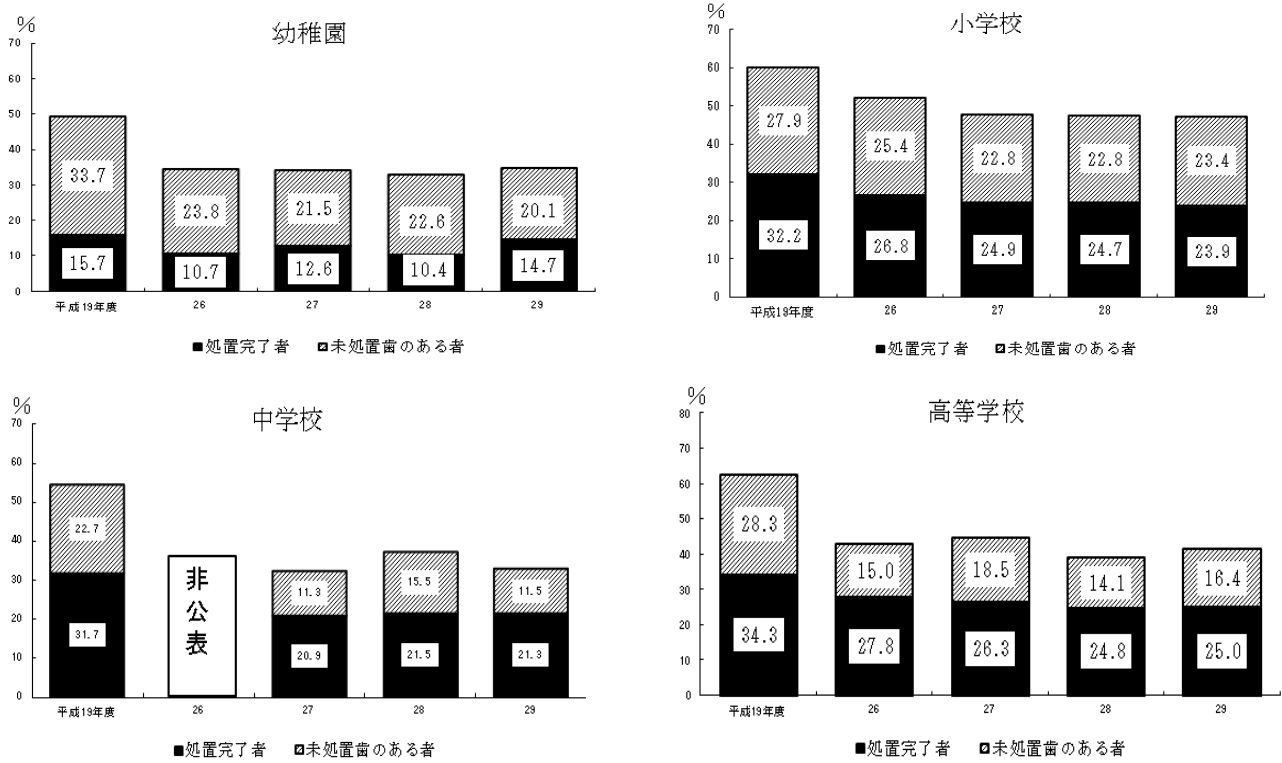
図 8 眼の疾病・異常者数



【むし歯（う歯）】

平成 29 年度の「むし歯」の者の割合（処置完了者を含む。以下同様。）は、幼稚園 34.7%、小学校 47.3%、中学校 32.8%、高等学校 41.3% となっており、前年度と比べると幼稚園と高等学校で増加しています。10 年前の平成 19 年度と比較すると、平成 29 年度は各学校段階で 12.8~21.6 ポイント低下しています。全国平均値と比較すると、京都府は小学校を除く学校段階で下回っています。

図9 むし歯（う歯）被患率の推移

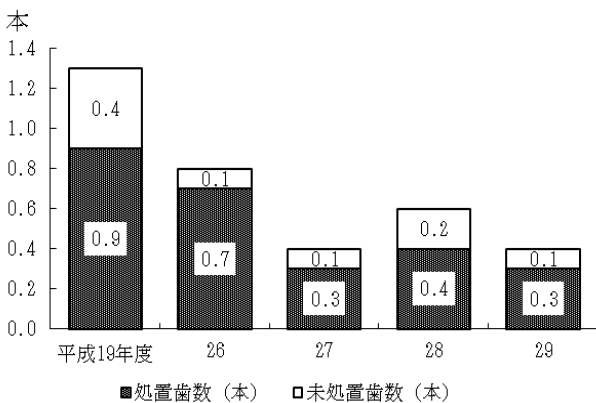


【12歳の永久歯の1人当たり平均むし歯（う歯）等数】

12歳の永久歯の1人当たり平均むし歯等（喪失歯及び処置歯数を含む）の「むし歯」数をみると、0.4本となっており、10年前の平成19年度と比較すると0.9本減少しています。

「むし歯」数について全国平均値と比較すると、京都府は0.4本下回っています。

図10 12歳の永久歯の1人当たり平均むし歯（う歯）等数



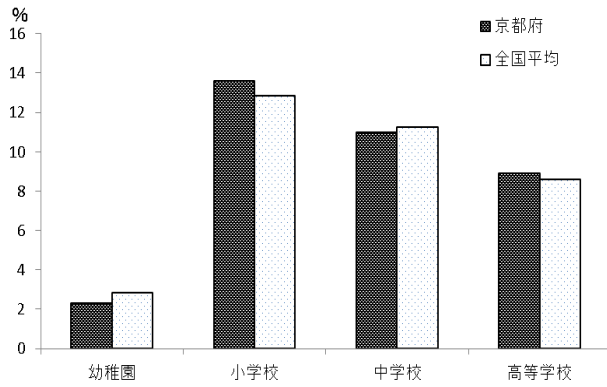
注: 端数の関係で内訳の計と合計が一致しない場合があります。

【鼻・副鼻腔疾患】

平成29年度の「鼻・副鼻腔疾患」（蓄のう症、アレルギー性鼻炎等）の者の割合は、幼稚園2.3%、小学校13.6%、中学校11.0%、高等学校8.9%となっています。前年度と比べると、小学校以外の学校段階で減少しています。

全国平均値と比較すると、小学校段階、高等学校段階で全国値を上回っています。また、京都府、全国平均ともに小学校段階以降改善する傾向があります。

図 11 鼻・副鼻腔疾患全国比

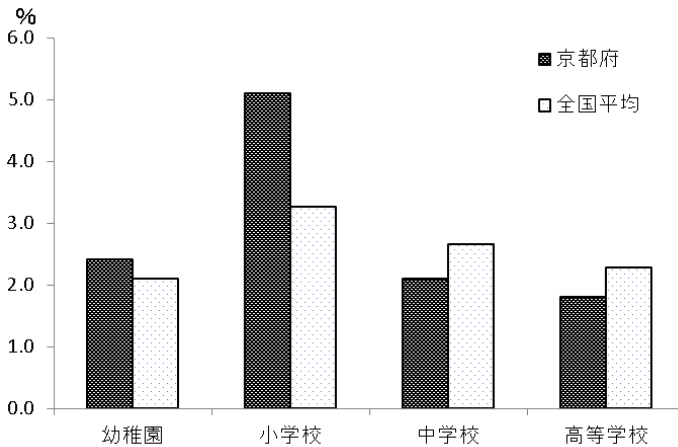


【アトピー性皮膚炎】

平成 29 年度の「アトピー性皮膚炎」の者の割合は、幼稚園 2.4%、小学校 5.1%、中学校 2.1%、高等学校 1.8%となっています。前年度と比べると、小学校を除く学校段階で減少しています。

全国平均値と比較すると、幼稚園及び小学校段階で上回っています。

図 12 アトピー性皮膚炎全国比

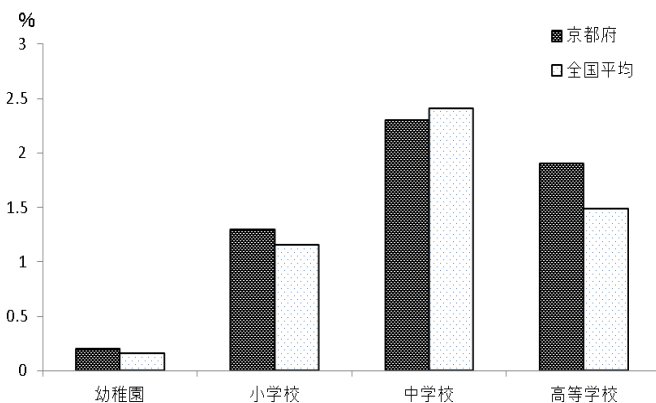


【せき柱・胸郭・四肢の状態】

平成 29 年度の「せき柱・胸郭・四肢の状態」異常の者の割合は、幼稚園 0.2%、小学校 1.3%、中学校 2.3%、高等学校 1.9%となっています。前年度と比べると、全ての学校段階で減少しています。

全国平均値と比較すると、小学校及び高等学校段階で上回っています（幼稚園段階は同値）。

図 13 せき柱・胸郭・四肢の状態全国比



【ぜん息】

平成 29 年度の「ぜん息」の者の割合は、幼稚園 0.8%、小学校 4.2%、中学校 2.7%、高等学校 1.7% となっています。前年度と比べると、小学校段階及び高等学校段階では増加しています。

全国平均値と比較すると、小学校で上回っています（中学校段階は同値）。

図 14 ぜん息の者の推移

